

【目的】国内外の文献レビューから遺伝看護実践能力の構成要素を明らかにしてその関係性を構造化することを目的とする。

【研究方法】電子データベース医学中央雑誌 Ver5.と Pubmed による検索とハンドサーチにより文献を検索しレビューを行った。検索時期は 2014 年 5 月～11 月である。日本語文献は「能力」と「遺伝」と「看護」との”and”検索を行い、海外文献は”genetics”と ”nurses” or ”nursing” “competence” を”and”検索を行った。データの分析は KJ 法を参考としながら、記述内容の翻訳と精読、グループ編成、構造化の手順を踏んだ。グループ編成のステップを、3 回繰り返し、段階的に抽象度を高めながらサブカテゴリー、カテゴリーを作成し、さらに統合したものにタイトルをつけた。構造化は、下位に含まれるサブカテゴリーの意味内容を踏まえて、その関連性について検討しながら行った。

【結果】12 文献から 5 つのコンピテンシーを分析対象とした結果、32 のサブカテゴリーから 12 のカテゴリーを作成し、さらに 6 つに分類し《Ethics&Attitudes 倫理観や態度》《Comprehensive Understanding 包括的に理解する》《Identification 識別/同定する》《Life design for Activities of daily living 生涯にわたって生活の支援をする》《Decision Support 意思決定の支援をする》《Collaboration 協働する》とタイトルをつけた。すべての能力の基盤であると位置づけた《Ethics&Attitudes》には看護職自身の価値観の認識や、遺伝情報の取り扱いに関する認識、クライアントの不安を理解する姿勢や自己研鑽をする姿勢が含まれていた。《Comprehensive Understanding》は、すべてのプロセスに必要な能力であり、意思決定に影響を与える個人、集団的な要因や遺伝学的課題に起因する心理社会的な影響を理解することが示された。《Decision Support》では、遺伝子検査等に関する自律的な行動と意思決定への支援やすべての人々の自律的な意思決定権を擁護すること、意思決定後の家族内での共有範囲や告知の調整を含む生涯を通じた支援をする能力が見出された。《Identification》では、遺伝学的な家族歴の情報収集から家系図を書き、遺伝要因を分析して遺伝学的サービスが必要となるクライアントを同定する能力が示された。遺伝子検査や臨床学的診断後に必要となる能力として《Life Support for Daily Activities》を位置づけ、クライアントと家族の個別性に合った生涯を通じての療養生活の支援と医学や遺伝学を基にした症状の管理や健康促進が含まれている。《Collaboration》は、遺伝学的検査後の《Comprehensive Understanding》《Decision Support》《Life Support for Daily Activities》を支える能力として見られ、クライアントの包括的な健康管理のために医療専門職との協働することとクライアントと協働することが含まれていた。

【結論】構造化の結果、遺伝看護実践能力は遺伝子検査までの期間、遺伝子検査や診断時、検査後のすべてのプロセスを通じた継続的な看護実践能力であることが明らかになった。